

飯能市域の養蚕信仰(江戸時代後期～明治時代初頭)

飯能市立博物館 学芸職員 村上 達哉

すでに信仰の担い手がいらない以上、飯能市において養蚕信仰は幻の信仰と言えます。しかしながら当市は織物集散地としての歴史を持ち、往時は養蚕・養蚕信仰共に非常に盛んでした。

信仰圏が広く良く知られた養蚕信仰としては、蚕影山(こかげさん)信仰(本社：現茨城県つくば市神郡の蚕影神社)と、絹笠信仰(信仰の拠点：現茨城県神栖市の星福寺)が挙げられます。神社の摂末社や石造遺物の分布を元にした研究によると、埼玉県において江戸時代以降は基本的に蚕影山信仰が優勢で、絹笠信仰は少ないようです。蚕影山信仰・絹笠信仰の対象となった神(絹笠信仰においては絹笠大神・衣襲明神の原型)は、共に金色姫です。金色姫は、16世紀半ばの『戒言』(かひこ)の写本に記されている、常陸国の養蚕起源説話の主人公です(註1)。

飯能市域では、東部(精明地区)に蚕影社を摂末社に持つ神社が3つ、上名栗に1つあり、そのうちの1社、下川崎の八坂神社の蚕影社は、明治の初めに筑波山麓の本社から分霊したと伝えられています。市域で収集した館蔵資料を見ると、「日本一社 蚕影山再建永代護摩連名簿」(半田実家文書 No.734)という古文書があり、「常州神郡館 別当 桑林寺」と書いてあります。「別当 桑林寺」の表記より、神仏分離以前、おそらく江戸時代のものでしょうか。また、「大日本常陸国筑波郡神郡村鎮座」とある「蚕影山大神」の掛軸(中村家文書 No.10213 写真1)もあり、これらは市域における蚕影山信仰の存在を傍証する資料と言えます。飯能市域は東部から山地にかけて、蚕影山の信仰圏に入っていると言って良いかもしれません。ただし、「須田家日記」(市指定文化財)の天保14(1843)年5月4日と天保15(1844)年4月22日に「蚕霊山御師」に関する記述があります。「蚕霊山」(「さんれいさん」あるいは「こだまさん」)は絹笠信仰の拠点である星福寺との関連が考えられます。

館蔵のおふだでは、当館が上名栗で収集した加藤樹家護符にも、「蚕影神社」「蚕影山牛玉宝印」と記されたものがあり、これらは蚕影山信仰に係るおふだと思われます。しかし加藤樹家において、養蚕に係るおふだでは蚕影山のものは少数で、地元や近隣の神社の他、どこの社寺のものか分からないおふだが多数を占めます(写真2)。

以上をまとめると、飯能市域においては江戸時代後期以降、蚕影山信仰が優勢であったと思われるも、19世紀半ばには蚕霊山の御師が来ている可能性があります。ただし、すでに諸賢により指摘されているとおり、実態としては、蚕影山など広く知られた蚕神以外にも、様々な社寺と神仏が人々の願いの受け皿となっていたようです。

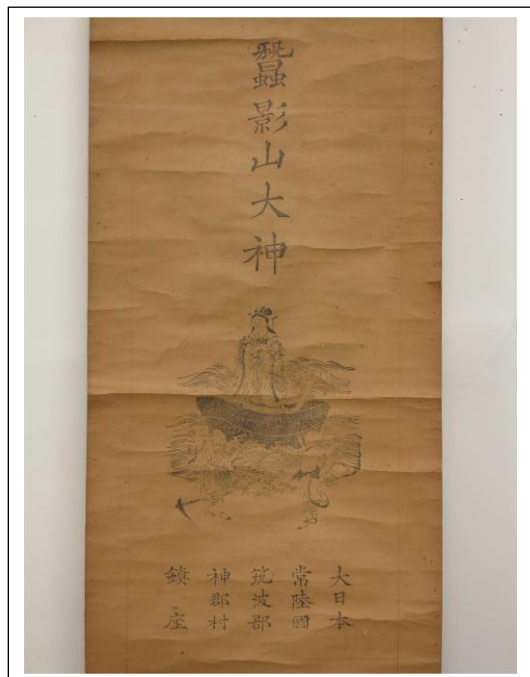


写真1 掛軸「蚕影山大神」(部分)

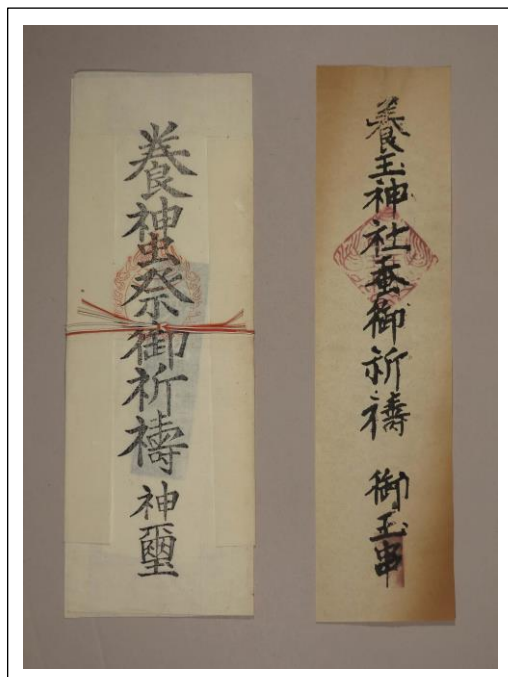


写真2 左：養蚕祭御祈禱 神璽(配布者不明)
右：養蚕神社御祈禱 御玉串(所在地不明)

註1 金色姫については、飯能市立博物館ホームページ That's きっとす 令和 6(2024)年 4 月「蚕神(かいこがみ)の起源」を参照のこと。

【引用・参考文献ほか】

矢嶋正幸「埼玉県の蚕神」『埼玉県立川の博物館 紀要』25号(埼玉県立川の博物館 令和7(2025)年)

埼玉県神社庁神社調査団編『埼玉の神社 入間 北埼玉 秩父』(昭和61(1986)年)